

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第58回『羅針盤となるリーダー

～「しっかりとした土台」、「しっかりとした骨組み」、
「しっかりとした使命感」～』

筆者は、先週土曜日（2021年5月22日）、講演『今、ふたたび新渡戸稲造！』の機会が与えられた（早稲田奉仕園スコットホールに於いて）。大変、貴重な有意義な時であった。日曜日は、『ゲーテ(1749-1832)ー>カーライル(1795-1881)ー>内村鑑三(1861-1930)/新渡戸稲造(1862-1933)』、特に、新渡戸稲造が体調を崩した時に、愛読したカーライルの『サター・リサタス：衣装哲学』の『“Do thy Duty, which lies nearest thee, which thou knowest to be a Duty”（汝の義務を尽くせ。汝の最も近くにある義務を尽くせ、汝が義務と知られるものを尽くせ）』の復習の時となった。

我々は、表面に現れた現象や結果だけに目を奪われやすいが、底に隠れているものにまで目を向けることが、実は大事なのである。見通す力が養われれば、時代の病理を診断できる力、独創的な力が培われてくるであろう。そのような眼力を持った人物が求められている。専門性に徹しつつ、哲学を持つことは、病理学をはじめ、全ての専門分野で可能なはずであり、現代こそ、専門分野からの哲学者の誕生が求められていると思われる。どの分野の人でも、専門分野で発見した真理を、「魂を揺さぶる言葉」で語れるようになれるはずである。がん哲学者とは、「高度な専門知識（がん学）と、幅広い教養」を兼ね備えている人物で、複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」である。単なる肩書きでは、人の魂を揺さぶる言葉は語れない。肩書きで人を説得しようとしている人を「看板かじり」という。練られた品性、人格そのものから、人を説得する言葉が発せられるのである。教師と呼ばれる立場にある者は、特にこのことを肝に銘じておきたいものである。「教育とは教えることでなく、示すこと」である。埋め立て地は、土台がはつきりせず、じわじわと水が浮き出てくる。これを液状化現象と呼ぶ。あらゆる分野で液状化現象が進む時代、「しっかりとした土台」、「しっかりとした骨組み」、「しっかりとした使命感」を持った人物、杭となり、羅針盤となるリーダーが必要である。自己を見つめ直し、個人のアイデンティティーを

確立することは、時代の要請であると痛感する日々である。まさに、「純度の高い専門性と丁寧な大局観」である。